

知的障害者のスポーツニーズと課題の検討

－スペシャルオリンピックス参加者の保護者を対象とした調査分析－

Consideration of Sports Needs and Issues of Persons with Intellectual Disabilities

田 引 俊 和

要旨

本研究では知的障害者スポーツの普及・促進に向けて、そのニーズや課題を明らかにすることを目的として、とくに教育現場以外で継続的に実施されているスポーツ実践に着目し、分析・検討する。得られた自由記述コメントを分類した結果、「スポーツ実践への評価・感謝」「実践上の提案・課題」「スポーツ環境」という3つの上位カテゴリーと、関連する下位サブカテゴリーが生成され、スポーツ機会の不十分さ、潜在的なスポーツニーズ、実施上の課題が明らかとなった。

キーワード：障害者スポーツ (disability sports) / 知的障害 (intellectual disabilities) /
スペシャルオリンピックス (Special Olympics)

はじめに

もともと医学的リハビリテーションから始まった障害者スポーツ^{註1)}は、国内では、1964年の東京オリンピックの際に行われた身体障害者の国際的なスポーツ大会（第13回国際ストークマンデビル国際大会）や、全国身体障害者スポーツ大会（第1回1965年）の実施、全国身体障害者スポーツ協会の設立（1965年）などを経て徐々に拡大してきた（高橋，2004；日本障害者スポーツ協会，2010）。最近では、パラリンピックのロンドン大会（2012年）、リオデジャネイロ大会（2016年）が注目され、2020年の東京大会への期待とともに障害者スポーツは多くの人たちに認識されつつある。

しかし、知的障害者スポーツの歴史はそれほど長いものではない。知的障害者の全国的なスポーツ大会は第1回の東京大会が1992年に実施されてはいるが、これは身体障害者の全国大会から30年近く後のことである。また、競技団体等の組織化^{註2)}や実際のスポーツ活動が活発になってきたのは、1990年代半ば以降のことである。単純な比較

はできないものの、先行して普及してきた身体障害者スポーツに比べておよそ20年超の遅れといえる。後発の要因としては社会的、あるいは関係者の意識の捉え方に言及するものがみられる。たとえば、能村（1998，p.149）は「社会的に知的障害者に対する理解が浅く、スポーツには関心が寄せられない」「家族や関係者に、知的障害者はスポーツできない、余分であるという先入観がある」「行政としてもスポーツよりも福祉、教育、施設整備等の推進が優先される」「本人の意思表示の弱さと、幼児期からのスポーツ経験が十分でない」という4点を挙げている。この他、「家族や関係者にさえ、スポーツは無理である、不必要と言うスポーツに対する評価があり、可能性や必要性が十分理解されなかった（矢部・佐藤，1995，p.1264）」、「声をあげにくい当事者に代わって、周囲の人が動かなければこの状況は変わらない（後藤，2008，p.833）」、「知的障害者がスポーツを楽しむためには、社会の側が知的障害者はスポーツを楽しむことができる存在であることを認識しなければならない（澤江，2013，p.89）」などの指摘がみられる。知的障害者スポーツの普及・振興には当事者の身体能力の育成や施設整備の

TABIKI, Toshikazu

北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
障害者福祉論・障害者スポーツ

充実化だけでなく、知的障害者がスポーツ参加することのとりえ方、位置付けが大きく影響していることになる。

今後、知的障害者スポーツの普及・振興のためには当事者側のニーズや課題、活動意義などを明確にし、根拠に基づいた推進策を展開することが求められる。本稿では教育現場以外で、かつ、イベント的なものでない継続的な知的障害者スポーツについて、そのニーズや課題を検討する。

1. 調査の設計

1. 1 調査目的, 対象, 方法

本研究では、知的障害者の学校現場以外での継続的なスポーツ実践に関して検討を行う。具体的には、知的障害者の継続的なスポーツを支援している「スペシャルオリンピックス^{註3)}」の会員を対象にした量的調査によりそのニーズや課題、到達点等に関する分析を行なう。しかし、その障害特性により量的調査に必要な質問紙法を当事者に用いることは困難なため、本研究では当事者とともにスポーツ参加する保護者に対する調査分析から当事者のスポーツニーズを推定して検討することとする。

調査票は、スペシャルオリンピックスの47都道府県にある地区組織のうち任意に選んだ複数地区を対象に2009年に郵送法により配布(2087)、回収(876、回収率42.0%)した。その内の保護者からの回答491件をここでの分析対象とした。なお、この年の在宅知的障害児・者は54.7万人で、スペシャルオリンピックス知的障害当事者の全国の会員数7,816人はこれの1.43%となっている(障害者白書平成21年版)。

1. 2 調査内容と分析方法

調査票は基本属性、知的障害者スポーツの効果・影響に関する質問項目群、自由記述コメント欄の3群で構成した。本研究ではとくに自由記述コメントに注目し、現場の経験を活用し問題を探るKJ法(川喜田 1967, 1970)を用いて知的障害者が行うスポーツに関する保護者の意識分析を行った。分析作業は、①得られた自由記述コメントについて精読し、②記載されている言葉や前後の文脈を検討して意味単位ごとの分析データ文に分け、

③類似の意味内容を持つデータ文を集約し、④サブカテゴリー(表札)を設けるとともに代表的なコメントをいくつか示し、⑤さらにこれをもとに抽象度のより高い上位カテゴリー(表札)を作成した。⑥作業の過程で、地域や個人名、活動場面などが特定される恐れのある記載については匿名化した。

なお、対象とする知的障害については詳細な障害区分や程度、あるいは療育手帳^{註4)}の所持などを限定することなく回答を得た。

1. 3 倫理的配慮

調査票配布にあたっては、事前に当該知的障害者スポーツ組織の責任者に質問用紙を示し、確認と同意を得た。また、調査票はすべて無記名調査用紙を用いた他、結果は研究目的にのみ使用され、かつ、統計的に処理を行い回答者等が特定されない旨を調査票上に記した。なお、調査用紙の内容は回答者の年齢、経験、立場(例えば保護者、支援スタッフ、当該障害者スポーツ組織の役員等)などに関わらず全て同一のものとした。

2. 結果

2. 1 回答者の属性

分析対象とした491件のうち、当該知的障害者スポーツ組織での参加頻度^{註5)}は表1のとおりであった。週に2~3回、週に1回、月に1~2回を合わせると71.5%で、多くの会員が週に1回から月に数回程度のスポーツ活動に参加していることになる。活動期間については、回答者による具体的な数値の記入により最小値0.1、最長19.0年、平均5.89±3.86年という結果が得られた。

表1：スポーツ参加状況

参加状況	回答数	%
週に2~3回	39	7.9
週に1回	134	27.3
月に1~2回	178	36.3
年に数回ぐらい	99	20.2
参加していない	30	6.1

2. 2 自由コメントの分類

自由記述コメントを分類した結果、「スポーツ実践への評価・感謝」「実践上の提案・課題」「ス

表2：自由記述コメント分類

上位カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコメント例（サブカテゴリー内の類似コメント数）
スポーツ実践への評価・感謝	具体的な効果・期待	<ul style="list-style-type: none"> ・できないだろうと思っていたが、続けることの大切さを実感した。 ・先の見えないわが子の将来が、楽しく、明るいものになった。 ・本人たちの社会参加のよい機会となっている。 ・子供の精神面にも多大に影響を与えて頂けたことを喜んでいる。 ・知的障がい者が一般社会に知られるようになった。啓発活動に感謝。(43)
	支援スタッフ等に対する感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・コーチやボランティアの方々にはいつも頭が下がる。 ・協力していただいているボランティア、企業にはありがたいと思っている。 ・たくさんのスタッフ、ボランティア等に支えられスポーツができる楽しさを感じ、感謝の気持ちしかない。(27)
	スポーツ機会に対する感謝	<ul style="list-style-type: none"> ・学校を卒業すると体を動かす機会はほとんどない。とっても必要な活動だと思っている。 ・スポーツの場を与えていただき、ありがたく思っている。 ・スポーツクラブ等何かさせたいと思っても健常な子供と一緒ににはちょっと無理だろうとなかなか一歩が踏み出せないで、この活動には気兼ねなく参加できる。(24)
	積極的な関与	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しい活動になるよう、保護者として協力していきたいと思っている。 ・自分なりに（微力ですが）協力したいと思う。 ・まだ下の兄弟に手がかかるので今はあまりお手伝いができないが、いつかは何かお返しができればと思っている。(19)
実践上の提案・課題	活動・指導内容の充実化	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ関係の資格を持ったボランティアの指導がほしい。 ・コーチ・指導者の技術不足を感じる。(6) <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・どんなに重度でも参加できればいいと思う。 ・情緒・知的にコミュニケーションが取りにくい子のことへの配慮があれば、もっと参加したい人も多くいると思う。(12)
	支援スタッフの数的充実	<ul style="list-style-type: none"> ・社会人の方で多忙のようではなかなか来ていただけない現状がある。 ・ボランティアの数が足りていないので、指導するのが難しいように思う。 ・学生さんのボランティアを求めたい。大学が近くにあるが、学生さんたちにはあまり知られていない。(21)
	組織運営	<ul style="list-style-type: none"> ・ルール（失格等の基準）の見直しをお願いしたい。本人たちはいつも全力で競技するが、その結果、失格は納得出来かねる。 ・同種目の活動場所を増やしてほしい。 ・全国大会には多くの参加者が出場できるよう検討願う。(52)
スポーツ環境	移動・送迎	<ul style="list-style-type: none"> ・親が健在でなければ本人の参加が大変難しい現状がある。 ・私（保護者）も今グループホームに入り活動に参加していません。送迎の時間等難しい面がある。 ・母親の私の体が不自由なため、子どもを活動に出す機会が減って残念なこともある。(19)
	広報・周知	<ul style="list-style-type: none"> ・パラリンピックの一部としか世間には見られていないような感じである。 ・もっと多くの人にこの活動を知ってほしい。 ・このような素晴らしい活動がもっともっといろいろなところで広がっていくことを願っている。(23)
	役割分担	<ul style="list-style-type: none"> ・親として負担は軽くないと思う。 ・他の障がい者を持つ親に話すと親の負担感ゆえに遠慮されることがある。 ・（保護者への）精神的な負担もある。他のスポーツのようにコーチ主導でプログラムが進められるといいと願っている。(29)
	年齢等	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの年齢があがると親も年をとり、その分活動への参加がだんだんしんどくなっているのは確か。 ・将来、親が年をとり高齢になった時は、活動に参加するのが困難なこともでてくると思う。(8)
その他	その他	<ul style="list-style-type: none"> ・今回のアンケートも、この活動にはとても大切なことだと思う。保護者の意見も、時々書面等で聞くことも良いことと考える。(14)

「スポーツ環境」という3つの上位カテゴリーが生成された(表2)。詳細を以下に説明する。

まず、上位カテゴリー「スポーツ実践への評価・感謝」では多くのコメントがあり、4つのサブカテゴリーを生成している。その中の「具体的な効果・期待」では、初めて継続的なスポーツ経験を得たことによる率直なコメントも含まれている。たとえば、「できないだろうと思っていたが続けることの大切さを実感した」「先の見えないわが子の将来が、楽しく、明るいものになった」などである。背景には障害特性に合ったスポーツ体験が十分でないことがあるといえる。さらに、「社会参加のよい機会となっている」「子供の精神面にも多大に影響を与えて頂けたことを喜んでいる」など、単に体力面や競技面だけでなくQOL(生活の質)向上への期待があることも示された。

また、活動を支えるスタッフ等に対しては、「コーチやボランティアの方にはいつも頭がさがる」「協力していただいているボランティア、企業にはありがたいと思っている」など多数の謝意を示すコメントがみられ、「支援スタッフ等に対する感謝」サブカテゴリーを生成している。さらに、サブカテゴリーの「スポーツの機会に対する感謝」にも多くのコメントがあり、潜在的なスポーツニーズがあることが確認できる。たとえば、「学校を卒業すると体を動かす機会はほとんどない。とっても必要な活動だと思う」「スポーツの場を与えていただき、ありがたく思っている」など、スポーツの機会に対する評価が多くみられる。知的障害者の社会生活上、とくに特別支援学校等を卒業したあとにはその機会が十分でないことはこれまでも示されており(後藤, 1992; 奥田, 2007)、本研究もこれらを支持する結果となった。

次に、上位カテゴリー「実践上の提案・要望」ではスポーツの実践場面に関する具体的な提案・要望としていくつかのサブカテゴリーを生成している。このうちサブカテゴリー「活動・指導内容の充実化」と「組織運営」には多くのコメントがみられる。具体例として「スポーツ関係の資格を持ったボランティアの指導がほしい」「コーチ・指導者の技術不足を感じる」「どんなに重度でも参加できればいいと思う」などがみられる。関連して、「社会人の方で多忙なようではなかなか来て

いただけない」「ボランティアの数が足りていないので、指導するのが難しいように思う」といった支援スタッフなどへの言及があり「支援スタッフの数的充実」サブカテゴリーを生成している。一方、サブカテゴリー「組織運営」では、「ルール(失格基準)の見直しを求める」「同種目の活動場所を増やしてほしい」「全国大会に出場できるように検討願う」などのコメントで構成され、個人レベルの要望・提案があげられている。

3つ目の上位カテゴリー「スポーツ環境」を構成するサブカテゴリー「移動・送迎」「役割分担」では、当事者だけでの行動や移動、あるいはスポーツ組織の運営協力等に制約のある知的障害者ならではのニーズが表れている。たとえば、「親が健在でなければ本人の参加が難しい現状」「親として負担は軽くない」などが示されている。先行研究でも保護者の付き添いが不要な参加を望んでいる(守田・七木田, 2004)ことや、保護者の負担感(高畑・武蔵, 1997; 柳澤 2012)が報告されており、当事者だけで完結しにくい知的障害者スポーツ特有のニーズ、課題が示されている。サブカテゴリー「広報・周知」では、「パラリンピックの一部としか見られていないような感じ」「もっと多くの人に知ってほしい」といったコメントがみられる。全体的に、社会における知的障害者スポーツの機会や理解の不十分さと、その拡大と共感を求める当事者(保護者)側の意識が表れている。

3. 考察

3. 1 知的障害者スポーツのニーズと課題の構造

自由記述コメントの分類では、「スポーツ実践への評価・感謝」「実践上の提案・課題」「スポーツ環境」という3つの上位カテゴリーが生成された(2. 2節)。継続的なスポーツへの評価と具体的な効果とともに、特別支援学校卒業後の日常生活で障害特性に合ったスポーツ機会が不十分、あるいは潜在的なニーズがあるという実態があらためて示された。いずれも知的障害者スポーツを推進することの根拠の一つとなり得る結果だといえる。また、指導者やボランティアなどの支援スタッフに対しては率直に謝意を感じている一方で、質的・量的な充実を求める回答も多くみられた。

運営のほとんどをスポーツボランティア^{註6)}に頼らざるをえない当該障害者スポーツ組織の現実的な課題となっている。

上位カテゴリー「スポーツ環境」では、活動場所までの移動・送迎に関するコメントと、保護者の負担感に関するコメントからサブカテゴリーを生成している。当事者だけの外出や移動、あるいはスポーツ組織の会員としての役割分担などに制約がある知的障害者特有のニーズが示されている。今後、知的障害者スポーツを普及・推進していくためには解決すべき部分だといえる。なお、今回の調査は保護者によるスポーツ会場までの送迎支援が得られる知的障害者を対象としている。このため在宅で生活している知的障害者のうち、保護者等による送迎支援が得られない人たちの継続的なスポーツ参加は十分でない可能性がある。また、費用負担に関するコメントは今回一件もなかった。知的障害者の経済状況、就労状況^{註7)}を考えると不自然ではあるが、理解ある保護者などの存在があってこそその結果だといえる。

スポーツ環境で示されたこれらの課題は本来の目的や効果、競技性とは直接関係ないものであり、スポーツ参加の前段階にある部分ともいえる。知的障害者のスポーツニーズの充足には理解ある保護者や支援スタッフの存在が不可欠だということであり、同時に、当事者主体のものになりがたい構造であることを暗示している。

3. 2 知的障害者スポーツの今後に向けて

サブカテゴリー「組織運営」には多くのコメントがあり特徴がみられた(52件、全体の17.5%)。内訳の多くは、「全国大会に出られるようにしてほしい」、「失格のルールを変更してほしい」というような個人レベルの要望・提案がほとんどで、逆に、活動内容や指導内容の充実化を求めるコメントは少なかった(6件、全体の2.0%)。他にも大会参加は望んでいない、余暇レベルで十分といった回答も散見された。当事者(保護者)側にとってのスポーツニーズは、ルールに基づいた競技や記録、勝ち負けというよりもスポーツ参加そのものにあるといえる。機会が増え、スポーツが身近で参加しやすいものとなり、それまでみられなかったような率直なニーズが表出してきたものと

考えられる。今回調査を行なったスペシャルオリンピックスが、障害程度や競技レベルなどで参加を限定、あるいは排除することなく、広く知的障害者のスポーツ参加を支援してきたことによるもので、当該組織が継続的に全国で活動を展開してきた一つの意義だといえる。

一方、スポーツ参加そのものへのニーズがあるのと同時に、現段階で数は多くはないが活動内容の充実化を求める層の存在も受けとめていかなくてはならない。今後の知的障害者スポーツの普及・振興のためには、単に一般スポーツを追随しながら参加や競技性を議論するのではなく、当事者側にあるスポーツニーズの把握とともに、組織運営や実践現場でのあり方、方向性を検討していくことが求められる。

付記

本研究は科研費(基盤 C21500611)の助成によるものである。また、調査に際しては、公益財団法人スペシャルオリンピックス日本、および関連地区組織に多大なるご協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

〈注〉

- 1) 「障害者スポーツ」という言葉についてはいくつかの捉え方や表現があるが(藤田, 2008, p.14; 矢部, 2010, p.196), 本研究では競技種別や活動水準などを限定することなく、対象とした知的障害者スポーツ組織で行われているスポーツプログラムを対象として回答を得ている。
- 2) 国内の知的障害者スポーツの主なものとして、全国的な大会では1992年に始まった「ゆうあいびっく」、組織的な活動を始めたものとしてスペシャルオリンピックス日本(1994年)、日本知的障害者水泳連盟(1999年)、日本知的障害者卓球連盟(1999年)、FIDバスケットボール連盟(1999年)、日本知的障害者スポーツ連盟(2000年)などがある(日本障害者スポーツ協会, 2010)。
- 3) 調査対象とした「スペシャルオリンピックス」(本部東京, 1994年設立)は、現在は全ての都道府県に活動拠点(地区組織)を置き活動を展開している。活動方針として、実践のほとんど全てを無償のボランティアで担っている他、保護者も重要な支え手と

されている。本研究では、複数の活動拠点（地区組織）の会員を対象に調査を行っている（渡邊2006, スペシャルオリピックス日本編2017）。

- 4) 知的障害に関する法的な定義はない。手帳制度については、「療育手帳」が適用され、A（重度）、B（その他）に分けられている。ただ、この手帳制度は身体障害がある人たちを対象とした「身体障害者手帳」のように全国同じものではなく、その名称や等級の分け方等は自治体ごとに異なる場合がある。
- 5) 厳密には本調査に回答した保護者のうち一部で当該スポーツ組織の委員等によりミーティングや事務作業などを役割分担しており、それが参加頻度の回答に影響し知的障害当事者（回答者の子ども）の活動頻度と若干の差異が生じている可能性がある。また、「参加していない」という回答が存在するのは、現在スポーツ活動に参加していない家族であっても会員として継続登録していれば調査対象として調査票を郵送したためである。
- 6) スポーツボランティアとは、報酬を目的としないで自分の労力、技術、時間を提供して地域社会や個人、団体のスポーツ推進のために行なう活動のことを意味する（SSF 笹川スポーツ財団, 2006）。
- 7) 特別支援学校の高等部卒業後（知的障害）の進路は約64%が社会福祉施設等であり、そのうち就労に関するものの多くが旧授産施設にあたる就労継続支援B型となっている。ここでの平均工賃は平成26年度で月額14,838円となっている（日本発達障害連盟, 2016）。

〈文献〉

- 藤田紀昭（2008）障害者スポーツの世界。角川学芸出版、p14.
- 後藤邦夫（2008）知的障害のある人とスポーツ、総合リハ、36（9）、p831-833.
- 後藤邦夫（1992）障害者スポーツの現状と将来への展望。スポーツ教育学研究、11（0）、41-48.
- 川喜田二郎（1967）発想法。中公新書。
- 川喜田二郎（1970）続・発想法。中公新書。
- 守田香奈子・七木田敦（2004）知的障害児のスポーツ活動への参加を規定する要因に関する調査研究：保護者への調査を通じたニーズの把握。障害者スポーツ科学、2（1）、70-75.
- 内閣府編『障害者白書（平成21年版）』2009.

- 日本発達障害連盟編（2016）発達障害白書2017年版。明石書店。
- 日本障害者スポーツ協会（2010）障害者スポーツの歴史と現状。日本障害者スポーツ協会。
- 能村藤一（1998）知的障害者スポーツの現状と課題。臨床スポーツ医学、15（2）：149-153.
- 奥田睦子（2007）総合型地域スポーツクラブへの障がい者の参加システム構築のための調査研究：障がい者の参加状況と受け入れ体制の構築に向けたクラブの課題。金沢大学経済論集、42、157-185.
- 澤江幸則（2013）知的障害のある人にとっての運動・スポーツの意味。現代スポーツ評論。創文企画、29、82-90.
- SSF 笹川スポーツ財団（2006）スポーツ白書。pp.87-95.
- スペシャルオリピックス日本編（2017）ゼネラルオリエンテーション標準テキスト。スペシャルオリピックス日本。
- 高畑庄蔵・武蔵博文（1997）知的障害者の食生活、運動・スポーツ等の現状についての調査研究。発達障害研究、19（3）、235-244.
- 高橋明（2004）障害者とスポーツ。岩波新書。
- 渡邊浩美（2006）障害者スポーツの社会的可能性。21世紀社会デザイン研究、（5）、135-144.
- 矢部京之助（2010）アダプテッド・スポーツ。田口貞善ほか編、スポーツサイエンス入門。丸善、pp. 196-206.
- 矢部京之助・佐藤賢（1995）知的障害児のフィットネスとスポーツ。臨床スポーツ医学、vol.12, No11：1259-1264.
- 柳澤亜希子（2012）自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性。特殊教育学研究、50（4）、403-411.